

介護老人保健施設での入所生活に伴う生活習慣病の変化と薬剤適正化

丸岡 弘治 ●介護老人保健施設横浜あおばの里 薬局長



当施設の管理栄養士と薬剤師

要旨

介護老人保健施設の入所によって生活習慣病に関する数値が改善し薬剤が見直せることが経験的にあると気づきから、実際のどの程度の改善がみられるか、またどのような変化がみられるか、一般化することができるかも含め検討する必要があると考え、本活動に取り組むこととなった。管理栄養士の食事面での評価も含め、血液データの評価、処方薬の変化に注目して、研究計画を立て実施することとなった。薬剤師と管理栄養士だけでは実現できるものではないため、医師、看護スタッフ、リハビリスタッフにも協力を得て実施することとなった。

東京大学倫理審査終了後、全国の様々な地域からの参加に同意頂いた7つの老健施設と共同研究を行うこととなった。しかし、新型コロナウイルスが猛威を振るい、緊急事態宣言が出されるなど、思うように研究・活動が進まず、不甲斐ないながら途中で経過報告をすることになった。

1. 背景と目的

BMIが標準未満の高齢者は低栄養の問題がある一方で、その逆の過栄養状態では生活習慣病と相関することが示されている。在宅生活において乱れた食生活を送っていた高齢者は、介護老人保健施設の入所に伴い医師や管理栄養士のもとで改善されるため、生活習慣病に関係する薬剤が不要になる可能性が高まり、減薬中止ができる機会が増えると推測される。しかし、介護老人保健施設での血液検査等が包括的に介護費用に含まれるため、血液検査実施回数は少ない傾向にある。

入所の経過によって、具体的にどのような変化がみられるか示す報告はない。そこで本活動では、生活習慣病を有している高齢者が介護老人保健施設入所によって栄養状態、血液データがどのような変化を示すかを明確にし、併せて生活習慣病関連薬の適正化についての分析を行う。

活動①生活習慣病薬の見直しには管理栄養士と看護師との連携が重要となるため、生活習慣病に対する栄養管理と薬剤処方の見直しを一体として考える意識を高める。活動②生活習慣病を有している高齢者が介護老人保健施設入所によってどのような変化を示すかを明確にし、併せて生活習慣病治療薬の適正化について分析を行う。本活動は薬剤師、管理栄養士、医師、看護師等の多職種で連携を取り、栄養摂取と生活習慣病治療薬の削減の関係について検討する。

2. 活動の方法

活動①について、管理栄養士と看護師が

「生活習慣病と薬剤適正化」に対する意識を高めるために、講師を招いてこのテーマに沿った勉強会を開催する。さらに講義内容のビデオ制作を行い医師、薬剤師にも同じ認識を持たせ、活動②につなげる。活動②については、複数の介護老人保健施設と共同で生活習慣病を有する利用者の入所時、3カ月後のデータの変動の確認を行い、分析する。

3. 現状の成果・考察

新型コロナウイルス流行により、2020年3月の時点で一緒に「活動②」に協力いただける予定だった施設の多くが辞退を申し入れてきて、2020年5月の段階では参加施設は3施設のみという状況でした。

急遽方向転換し、全国から協力いただける施設を募ったところ、7施設に増やすことができ、開始に向けて準備を進めることとなった。「活動②」に関しては全施設で70症例を目指しているが、現在68症例の登録者がおり、60症例は現在も観察中となっている(2021年3月現在)。

しかし、開始が秋から冬という体調を崩しやすい時期のためか、入院退所による脱落者が多くみられ、登録症例数をあらためて追加して2021年7月頃までに期間を延長している状況である。「活動①」に関しては、講師を招いての講義は集合型から、ZOOMを使ったりリモート型の講義で実施できている。

また、開始当初計画の多職種によるワークショップについては、現状では実現できておらず、2021年の夏から秋頃の実現を目指している。令和3年度介護報酬改定、新型コロナウイルスワクチン接種に伴う各施設・各職種の業務増加、追加の緊急事態宣言等によりさらに活動を停止せざる得ない状況もあるが、ZOOMを使った形での研修会も含めて検討していく。

4. 今後の展望

「活動①」を実施することで、介護老人保健施設において、管理栄養士と看護師の薬剤適正化への意識を高め、薬剤師等の多職種協同で薬剤の適正化を促進する一つのモデルの構築ができる。

「活動②」を実施することで、介護老人保健施設の入所に伴ってどのように生活習慣病関連データが推移していくのかを「見える化」することで、減薬のベストなタイミングの目安を提示ができると考えられ、老健薬剤師や施設訪問する薬局薬剤師にとっても薬剤見直しを促す要素となると思われる。

また、こうした薬剤師・管理栄養士・医師等の同一グループではない多施設共同の前向き研究はこれまでに前例がほとんどないことから、今回の活動が一つの参考になる活動モデルを示すことができると考えられる。